

第三十九回富山県中学生水の作文コンクール入賞作品講評

委員 浜谷尚生

伊藤勢津子

佐々禮子

総評

今年度の応募総数は三三六編、応募校は三校でした。富山県には名水百選に選ばれた湧水が八か所、それも県内に広く分布していて水に関する話題に事欠かないことを考えると、応募数の少なさを寂しく思います。今回の応募作品はそれぞれの持ち味があつて甲乙つけがたく、選出には例年以上に時間をかけて甲論乙駁を重ねました。

発展途上国の水事情を知り、清冽な水に恵まれた富山と対比してその厳しさに心を痛める内容は、毎回多くの作品が取り上げるテーマです。そして、節水や水資源の保護に努めても、それが直接困窮している人を救うことにならないジレンマは、作文に取り組む多くの中学生を悩ませます。その中で募金活動や井戸掘り活動などの提案、将来現地へといった言葉を心強く感じました。しかし「解決の難しさを実感した」という言葉もまた貴重です。なぜなら、無関心こそ最大の罪だからです。

また、日本でも水の無駄遣いや地下水の汲み上げ過ぎ、自然破壊など将来の水事情に不安材料は多く、決して他人事ではないという言葉も心に残りました。水に関する意識を広げ深めるきっかけになるよう、より多くの投稿を願っています。

優秀賞（三編）

水という存在

黒部市立清明中学校二年 車谷穂香

くるまや ほのか

水道水だから安全と考えている私たちは、車谷さんの「水道水は何が入っているか分からない」という言葉に「そんなことはないだろう」と思ってしまう。でもそういえば欧米の人は日常生水を飲まないらしい

いし、日本のレストランのようにまず水が出ることもないと聞きました。また、国内でも他の都道府県から来た人が富山の水のおいしさに驚くようです。確かに水道水と言っても様々なランクがあるので車谷さんの作文で改めて気づかされました。

変色した水、温水が突然冷水にとか、風呂の水が突然ストップなどといった体験をした筆者だけに富山の水のすばらしさを身にしみて実感したことでしょう。「私が見とれた立山連峰」とそこから生まれる清流

についての記述も的確で整っています。

これからも水と共に生きるために

黒部市立清明中学校三年

惣万そうまん 真帆まほ

世界で、水を得ることが難しく、それもきわめて不衛生な水で生活している地域があるという実情。そのことを知った惣万さんは、その時の気持ちを「当たり前が崩れた」と表現しました。当たり前と思っていたが、そうではなかった、などとほかの言葉と置き換えてみたとき、「崩れた」という言葉がその時の筆者の心情を表すのにぴったりしていて、一つの言葉もおろそかにしていないことを感じました。選り抜かれてキラツと光る言葉が文章全体を光らせることもあるのです。

日本、中でも富山と外国の水事情を対比してコメントする作品は多いのですが、日本にも同じ事情が、と淀川をより挙げたのは惣万さん独自の視点でした。地下水の汲み上げ過ぎによる地盤沈下や水質悪化は確かに他人ごとではないですね。「他人事ではなく自分事に」さて、自分事としてまず何から始めましょうか。

美味しい水をいつまでも

黒部市立清明中学校二年

近川ちかがわ 藍子あいこ

優れた作品と評価される条件の一つに作品の独自性ということがあります。つまり、その人でないと書けないとか、作品にその人らしさがないにじみ出ているということです。近川さんの作品は、自分の住む地域で清水と呼ばれる湧水に目を向け、保育園や小学校での思い出など自分の体験をもとに綴られていて、文章全体に近川さんらしさがあふれていま

す。文章に書き手の人柄が表れているからこそ、読み手もそれに惹かれ作者に寄り添って読み進めていくでしょう。

水を通じた地域のつながりや伝統に目をつけたことも近川さん独自の視点だし、題名の「いつまでも」は美味しい水だけではなくそういった伝統や人間関係についての願いでもあると感じました。

入賞（五編）

「水」への感謝を忘れない

高岡市立牧野中学校二年

石灰いしはい 大晟たいせい

作品を通して述べたいことがそのまま題名になっています。題名は読者を引きつける大切な鍵、説明文や意見文でいい題名は最も短い全文の要約なのです。

富山の水はなぜおいしいか、多くの人が取り上げているテーマですが、筆者はこのことについて要点を逃さず簡潔にまとめています。家族で行った黒部ダムの様子も臨場感があふれ、その時の様子が読み進めながら彷彿として浮かびます。石灰さんの表現の巧みさが光ります。

頭括型の文章について別の項で述べますが、石灰さんの文章はそれとは逆に尾括型といえるかもしれません。つまり幾つかの事例を挙げてそれぞれの段落の終わりに考えをまとめるといった形になっています。最後の段落とその結びの一文が全文のまとめとしてすばらしい。

まずは私から

高岡市立牧野中学校二年

なかやま 中山 めい 愛唯

「まずは私から」という言葉に中山さんの強い決意を感じます。思いを端的に表すために、冗長な説明よりも考え抜かれた短い言葉の方が確実に伝わるんですね。

作品の中には数字が多用されています。六割が水、二割失うと、一日百リットル、日本では二一四リットル、二一億人、一八〇万人、総人口の四割などなど。数字は自分の意見を述べるとき事実を裏付ける動かしがたい根拠になります。ただ調べた数字を羅列するのではなく、必要な数字を選んで使うことが大切です。

「水を分けてあげたい。でもできることは少ししか…」この作文に取り組む人たちに共通の悩みですね。「ちっぽけだけれどもまず私から」その気持ちが高い。

水と関わる

高岡市立牧野中学校二年

はすざわ 蓮澤 ありさ ありさ

説明文や意見文で、まず最初に結論を述べてそのあとその理由を述べていく進め方を頭括と言いますが、蓮澤さんの文章はこれに当たります。読み手は最初の短い段落で「水が命の源とは？」「水が命を奪うとは？」と問題をもって先を読み進めます。

生き物の代表はひまわり、命を奪うのは台風や土砂災害でした。読み手は納得しながら、さらに自分なりの思いを付け加えていくでしょう。ある人は水田を思い浮かべまたある人は洪水で流された家を思い浮かべるかもしれません。読むという活動には単に受け入れるだけでなく読者の思考を

促す働きもあるのです。

黒部ダムを訪れた経験から、蓮澤さんは、再生可能なエネルギーとして水を活用することを提案しました。その期待通り小水力発電など利用は進んでいるはずですよ。

蛇口一つで救える命

小矢部市立石動中学校三年

みずかみ 水上 あきは 陽葉

問いを立ててそれに答えていく形で書き始めましたが、その問いは他の誰かにとりよりも水上さん自身に対しての問いかけとして読みました。文章を綴るのは誰かに自分の思いを伝えるためですが、それだけではなく、自分が知りたいことや悩んでいることが書くことによって明らかにしていくという働きがあるのです。書き終わってから「ああ、自分はそんなふうにも思っていたんだ」と気づくことがあります。「この豊かで美しい水は生き物の心臓です」「心に大きな波が立ちました」「心が締め付けられるように」と言った比喻は実感がこもり生きています。また「その国の子どもたちは夢を追う時間がありません」という訴えからは、水上さんの切迫した思いが伝わります。

家族で考えた水のこと

高岡市立牧野中学校二年

やまもと 山本 こうたろう 耕太郎

女の子が往復五〇分以上かけて水くみを、という書き出しで、読み手は運べる量がそれほどでもないこと、もちろん学校へも行けないだろうことなど想像するでしょう。文章は読み手の想像を促し、読者を筆者の世界に引き込みます。

どうすれば、という思いが家族での話し合いや海外でボランティア活動をした担任の先生の話へと広がりました。問題を持つことが考えを深めるスタートです。そして結論はアフリカ支援について「知恵を出し合っても解決は難しい」でした。たくさん話し合ったうえでの思いだけに実感が伝わります。言葉だけの安易な方策に満足するよりも、難しいという結論こそ解決を模索する次の活動に繋がるはずです。